

小笠原敏夫先生を悼む

会員のために
できることを
常に考え行動する

今年9月21日、長年にわたり保険医運動と協会の発展、特に協会歯科部会の創設期から歯科会昌2千名超の発展とともに歩み、協会活動に一生を捧げた小笠原敏夫先生（横浜市緑区・歯科）が永

歯科の差額問題から低診療報酬問題の改善運動、歯科会員の世話役、社会保障論に基づく保険医運動の理念と使命など、穏やかに、時に力強く、江戸っ子調で語られる姿は、今も多くの協会会員が思い出されることでしよう。

「歯科部会員として、協会理事、監事の一人として、会員のためにできることを常に考え、行動することを第一にしてきました。入会から今日まで、この考えはいささかなりとも揺らいだことはありません」——協会60年史の発刊によせて小笠原先生が語られた一文です。

小笠原先生の生前のご尽力に深く感謝するとともに、先生の安らかなご冥福をお祈りいたします。



私が理事として理事会等の会議に出席するようになつた頃、小笠原先生はすでに監事となられ、理事会での議論を俯瞰して発言する立場でいらした。理事会での議論が盛り上がらないといきには、発破をかけるべく厳しい言葉を発せられたともあつたと記憶している。

年の離れた同志

先生が神奈川県保険医歯科会に入会された1970年は、協会に歯科部会が創設



第3回 大会代表懇親交流会

保団連副会長
宇佐美 宏

なか結びつかなかつた
からです。
私と先生とは、日本
大学の同窓で、後輩の
私をよく言遣つてくれ
ました。同窓とはいつ
ても一廻り近く年齢が
違つて、先生の大学
でいました。

の前夜の飲み会でも主に盛り上がり、会議中とは違った先生の柔軟なお顔に接することも、できたら良い思い出です。

小笠原敏夫先生を偲んで

した。」この信念の下、長
きにわたり協会活動に貢
献された。しかしながら、
歯科診療に対する診療報酬
の適性評価については「途
半ばで止つてしまつた」。